

世界ノ 光が長くその中をつらぬき、それを見つけた時のおどろき、喜びは今も忘れられない。こんなに素晴らしい、清らかな美の世界が、私一人の前にあるノ、そしてそれが一人の人間を洗う。

あれから三年、しかしその事は今も活々とおたらしく忘れられない五月の思い出である。

何時だったのか？ ささやかに並んだわが家の宝、植木の鉢に美しいたくましい葉が朝毎にのびる。小さな鉢のまわりには苔がびっしりと生えあふれるばかりだ。毎朝毎朝見るこの小さな窓のむこうの自然のたえずまい。一列に並んだこの植木鉢、これだけの事だが、朝毎のおどろきは大きい。

山やお寺や、小さな流れ、池や細い細い路と友達であった昔ながらの住みなれた家を離れ、電車や自動車、工事の音、アスファルトにかこまれた街の中に住まねばならないと決った時から、そんな自分はないと得ないと力を失せて半年をすごしたものだ。が、あたらしくはじめたこの住まいの生活に第一回目の五月がめぐって来た時、カコの自然の中での生活から汲み取っていたあ

らゆるものがよみがえって、力となってくれたのを思う。以来、一人で歩いて得た山や小路での喜びやおどろき、力となったものは、今も生活の中に生きつづけており、それは、どんな時にもみどりの一鉢をだきかかえて離さない私たちの生活へと発展した。再び、今年も土と水と太陽と緑がこの上なく美しい命に溢れた季節がめぐって来たノ

お寺の庫裏からあつたかいみそ汁の香りが、隣りから子供のさげび声。五月の朝はすっかり明け、人々の活動が次第に早さを増して、はじめられる。

(校友・同志社教会教師)

### 酒話教授遺句抄について

原 柯 城

故酒話教授は土岐光風の俳号にて句に親しまれ、私の主宰誌『風雪』に毎月その収獲を發表されていました。

ここに、故教授の句の一端を紹介し、御冥福を祈るものであります。

(昭六大経、馬酔木同人)

### 故酒話仲男教授遺句抄

鵜の巖を傾けつくす大き瀹

鵜の巖をめぐけて瀹の追ひあえる

瀹を追ひ飛魚たたす船の水尾

甲板椅子低し日傘の影ゆれて

池の面の塔の空なり蓮咲ける

巡礼の背に負ひ去るや蟬時雨

冬瀹にしばらく沈む巖壘

瀹呼ぶと崖まろびゆく落椿

海まぶし蟹の家囲ふ椿垣

雪解あと野焼き山焼き湖北村